

感染症・食中毒の予防及びまん延防止のための指針

1.総則

株式会社 Lien は、利用者の使用する施設、食器その他の設備又は飲用に供する水について、衛生管理に努め、又は衛生上必要な措置を講ずるとともに、医薬品及び医療用具の管理を適正に行い、施設において感染症が発生し、又はまん延しないように必要な措置を講ずるための体制を整備することを目的に、感染症及び食中毒の予防及びまん延の防止のための指針を定め、利用者の安全確保を図ることとする。

2.体制

(1)感染防止対策委員会の設置

ア 目的

施設の感染症及び食中毒の予防及びまん延の防止のための対策を検討する「感染防止対策委員会」を設置する。

イ 感染防止対策委員会の構成

感染防止対策委員会は、次に掲げる者で構成する。

委員長：倉田萌香

副委員長：森谷友美

ウ 感染防止対策委員会の業務

感染防止対策委員会は、委員長の召集により感染防止対策委員会を定例開催(年4回9月 12月 3月 6月)のほか、必要に応じて開催し、「感染症及び食中毒等の予防」と「感染症及び食中毒等発生時の対応」のほか、次に掲げる事項について協議する。

(ア) 施設内感染防止対策の立案。

(イ) 指針・規定・マニュアル等の作成及び見直し。

(ウ) 施設内感染防止対策に関する、職員への研修の企画及び実施。

(エ) 新利用者の感染症の既往の把握。

(オ) 利用者及び職員の健康状態の把握。

(カ) 感染症及び食中毒等の発生時の対応と報告。

(キ) 感染防止及び食中毒防止等の対策実施状況の把握と評価。

(2)職員研修の実施

施設の職員に対し、感染防止対策の基礎的内容等の適切な知識を普及・啓発するとともに、衛生管理の徹底や衛生的な介護の励行を目的とした「感染症及び食中毒の予防及びまん延の防止のための研修」を感染防止対策委員会の企画により、以下の通り実施する。

ア 新規採用者に対する研修

新規採用時に、感染対策の基礎に関する教育を行う。

イ 全職員を対象とした定期的研修

全職員を対象に、別に感染防止対策委員会が作成する教材を用いた定期的な研修を年2回実施する。

(3)その他

ア 記録の保管

感染防止対策委員会の協議内容等、施設内における感染症及び食中毒予防対策に関する諸記録は利用者との契約終了後5年間保管する。

3.平常時の衛生管理

(1)施設内の衛生管理

環境の整備、排泄物の処理、血液・体液の処理等について、次の通り定める。

ア 環境の整備

施設内の環境の清潔を保つため、以下の事項について徹底する。

(ア) 施設内は寒暖計で計測し適温状態(冬季の湿度の状態含む)に保つ。

(イ) 整理整頓を心がけ、こまめに清掃を行うこと。

(ウ) 清掃について、床の消毒はかならずしも必要としないが、1日1回以上湿式清掃し、乾燥させること。

(エ) 使用した雑巾やモップは、こまめに洗淨、乾燥すること。

(オ) 床に目視しうる血液、分泌物、排泄物などが付着しているときは、手袋を着用し、0.5%の次亜塩素酸ナトリウムで清拭後、湿式清掃して乾燥させること。

(カ) トイレなど、利用者が触れた設備(ドアノブ、取手など)は、消毒用エタノールで清拭し、消毒を行うこと。

(キ) 車内環境整備・消毒

排泄物の処理については、以下の2点を徹底すること。

(ア) 利用者の排泄物・吐しゃ物を処理する際には、手袋やマスクをし、汚染場所及びその周囲

を、0.5%の次亜塩素酸ナトリウムで清拭し、消毒すること。

(イ) 処理後は十分な手洗いや手指の消毒を行うこと。

ウ 血液・体液の処理

職員への感染を防ぐため、利用者の血液など体液の取り扱いについては、以下の事項を徹底すること。

(ア) 血液等の汚染物が付着している場合は、手袋を着用してまず清拭除去した上で、適切な消毒液を用いて清拭消毒すること。なお、清拭消毒前に、まず汚染病原体量を極力減少させておくことが清拭消毒の効果を高めることになるので注意すること。

(イ) 化膿した患部に使ったガーゼなどは、他のごみと別のビニール袋に密封して、直接触れないように感染性廃棄物とし、分別処理をすること。

(2) 日常の支援にかかる感染防止対策

ア 標準的な予防策

標準的な予防対策として、重要項目と徹底すべき具体的な対策については、以下の通りとする。

<具体的な対策>

- ・ 血液・体液・分泌物・排泄物(便)などに触れるとき
- ・ 傷や創傷皮膚に触れるとき

⇒手袋を着用し、手袋を外したときには、石鹸と流水により手洗いをする

<重要項目>

(ア) 適切な手洗い

(イ) 適切な防護用具の使用

(1) 手袋

(2) マスク・フェイスシールド

(3) ガウン

(ウ) 利用者ケアに使用した機材などの取扱い

- ・ 廃棄物の取り扱い
- ・ 周囲環境対策

(エ) 血液媒介病原対策

(オ) 利用者配置（隔離）

・ 血液・体液・分泌物・排泄物(便)などに触れたとき

⇒手洗いをし、必ず手指消毒をすること

・ 血液・体液・分泌物・排泄物(便)などが飛び散り、目、鼻、口を汚染する恐れのあるとき

⇒マスク、必要に応じて(感染防止対策委員長から指示があったときなど)ゴーグルやフェイスマスクを着用すること

・ 血液・体液・分泌物・排泄物(便)などで、衣服が汚れる恐れがあるとき

⇒プラスチックエプロン・ガウンを着用すること

イ 手洗いについて

(ア) 手洗い :汚れがあるときは、普通の石けんと流水で手指を洗浄すること

(イ) 手指消毒:感染している利用者や、感染しやすい状態にある利用者のケアをするときは、洗浄消毒薬、擦式消毒薬で洗うこと

それぞれの具体的方法について、以下のとおりとする

(ア) 流水による手洗い

排泄物等の汚染が考えられる場合には、流水による手洗いを行う。

<手洗いにおける注意事項>

1 まず手を流水で軽く洗う。

2 石けんを使用するときは、固形石けんではなく、液体石けんを使用する。

3 手を洗うときは、時計や指輪をはずす。

4 爪は短く切っておく。

5 手洗いが雑になりやすい部位は、注意して洗う。

6 使い捨てのペーパータオルを使用する。

7 水道栓の開閉は、手首、肘などで行う。

8 水道栓は洗った手で止めるのではなく、手を拭いたペーパータオルで止める。

9 手を完全に乾燥させること。

(イ) 手指消毒

手指消毒には下表のとおりの方法があるが、施設では手指の場合に、アルコール含有消毒薬を用いた擦式法を用いることとする。

消毒法	方法
擦式法(ラビング法)	アルコール含有消毒薬を約3ml、手に取りよく擦り込み、(30秒以上)乾かす。
清拭法(ワイピング法)	アルコール含浸綿で拭き取る。

ウ 食事介助の留意点

食事介助の際は、以下の事項を徹底すること。

- (ア) 支援者は必ず手洗いを行い、清潔な器具・清潔な食器で提供すること。
- (イ) 排泄介助後の食事介助に関しては、食事介助前に十分な手洗いを行い、介護職員が食中毒病原体の媒介者とならないように、注意を払うこと。
- (ウ) 利用者が、コップによる水分補給をする場合には、使用する都度、洗浄すること。

エ 排泄介助(おむつ交換を含む)の留意点

便には多くの細菌など病原体が存在しているため、介護職員・看護職員が病原体の媒介者となるのを避けるため、以下の事項を徹底すること。

- (ア) おむつ交換は、必ず使い捨て手袋を着用して行うこと。
- (イ) 使い捨て手袋は、1回ごとに取り替える。また、手袋を外した際には手洗いを実施すること。
- (ウ) おむつ交換の際は、利用者一人ごとに手洗いや手指消毒を行うこと。

カ 日常の観察

(ア) 介護職員は、異常の兆候をできるだけ早く発見するために、利用者の体の動きや声の調子・大きさ、食欲などについて日常から注意して観察し、以下に掲げる利用者の健康状態の異常症状を発見したら、すぐに、看護職員や嘱託医師に知らせること。

(イ) 嘱託医師・看護職員は、栄養摂取や服薬、排泄状況なども含めて全体的なアセスメントをした上で、病気の状態を把握し、状況に応じた適切な対応をとること。

<注意すべき症状>

主な症状 要注意のサイン

主な症状	要注意のサイン
発熱	・ぐったりしている、意識がはっきりしない、呼吸がおかしいなど全身状態が悪い ・発熱以外に、嘔吐や下痢などの症状が激しい
嘔吐	・発熱、腹痛、下痢もあり、便に血が混じることもある。 ・発熱し、体に赤い発疹も出ている。 ・発熱し、意識がはっきりしていない。
下痢	・便に血が混じっている。 ・尿が少ない、口が渇いている。
咳、咽頭痛・鼻水	・熱があり、たんのからんだ咳がひどい。
発疹（皮膚の異常）	・赤み、発疹等

4.感染症発生時の対応

(1) 感染症の発生状況の把握

感染症や食中毒が発生した場合や、それが疑われる状況が生じた場合には、以下の手順に従って報告する。

ア 職員が利用者の健康管理上、感染症や、食中毒を疑ったときは、速やかに利用者と職員の症状の有無(発生した日時、及び居室ごとにまとめる)について、管理者に報告する。

イ 施設管理者(感染症防止対策委員長)から報告を受けた場合、施設へ対し必要な指示を行うとともに、診断名、検査、治療の内容等について所轄庁及び地域保健所・市役所担当課に報告するとともに、関係機関と連携をとる。

(2) 感染拡大(まん延)の防止

職員は感染症若しくは食中毒が発生したとき、又はそれが疑われる状況が生じたときは、拡大を防止するため速やかに以下の事項に従って対応する。

ア 職員

(ア) 発生時は、手洗いや排泄物・嘔吐物の適切な処理を徹底し、職員を媒介して感染を拡大させることのないよう、特に注意を払う。

(イ) 管理者の指示を仰ぎ、必要に応じて施設内の消毒を行う。

(ウ) 嘱託医師や看護師の指示に基づき、必要に応じて感染した利用者の隔離などを行う。

(エ) 別に定めるマニュアルに従い、個別の感染対策を実施する。

イ 管理者

(ア) 感染症若しくは食中毒が発生したとき、又はそれが疑われる状況が生じたときは、被害を最小限とするために、職員へ適切な指示を出し、速やかに対応する。

(イ) 消毒薬は、対象病原体を考慮した適切な消毒薬を選択する。

ウ 施設管理者(施設長)

管理者の指示の下で協力病院や保健所に相談し、技術的な応援を依頼し、指示を受ける。

(3) 関係機関との連携

感染症若しくは食中毒が発生した場合は、以下の関係機関に報告して対応を相談し、指示を仰ぐなど、緊密に連携をとる。

- ・ 協力機関の医師
- ・ 保健所

また、必要に応じて、下記関係者へ情報提供を行う。

- ・ 職員への周知。
- ・ 家族への情報提供と状況の説明

(5) 行政への報告

ア 所轄庁への報告

施設管理者は、次のような場合、別に定める報告書により、迅速に塩釜保健所へ報告する。

<報告が必要な場合>

- ① 同一の感染症や食中毒による、またはそれらが疑われる死亡者・重篤患者が、
1週間以内に2名以上発生した場合
- ② 同一の感染症や食中毒の患者、またはそれらが疑われる者が10名以上又は全利用者の半数以上発生した場合
- ③ 通常の発生動向を上回る感染症等の発生が疑われ、特に施設長が報告を必要と認めた場合

※ 同一の感染症などによる患者等が、ある時点において、10名以上又は全利用者の半数以上発生した場合であって、最初の患者等が発生してからの累積の人数ではないことに注意する。

<報告する内容>

- 1 感染症又は食中毒が疑われる利用者の人数
- 2 感染症又は食中毒が疑われる症状
- 3 上記の利用者への対応や施設における対応状況等

5.その他

(1) 利用予定者の感染症について、当施設は、一定の場合を除き、利用予定者が感染症や既往であっても、原則としてそれを理由にサービス提供を拒否しないこととする。

(2) 指針等の見直し

本指針、感染防止対策委員会規定、感染症対策に関するマニュアル等は感染防止対策委員会において定期的に見直し、管理者の承認を得て改正する。

(附則)

この指針は、令和5年9月14日から施行する。